

細胞の気持ちがわかる柔道整復師  
先生も現在進行形で学んでいます

平成14年にWHO（世界保健機関）で初めて紹介された柔道整復という療法。骨折やねんざ、脱臼などを、人が持つ自然治癒力を最大限に引き出して治療する、日本古来の医療技術です。ここは帝京大学・宇都宮キャンパスの医療技術学部柔道整復学科。学生たちに包帯を巻かれているのは、講師の刈屋太郎先生。もちろん普段の実習でこんな姿になることはありませんが、

良さも、学生たちから愛される理由かもしれません。実は先生、医療に従事し講師を務めながら、同時に帝京大学大学院理工学研究科の現役大学院生でもあるのです。「細胞の気持ちがわかる柔道整復師」という学科のテーマをより深く探りたくて、バイオサイエンスの勉強を始めました。大学院では、治療で使う超音波や低周波を当てたときの細胞の活性化を調べています。時間があればずっと顕微鏡を覗いていたいくらい面白いですよ」。他にも医療工学の教授と一緒にギプスの新素材を考えたり、柔道整復師の活躍の場を海外で模索したり

と、刈屋先生のビジョンは幅広い。「様々な異分野の人たちとつながることができるのが総合大学の魅力。また、自分自身が学び続けることで、学生たちにも刺激になればいいなと思っています。人生は一度きりなんだから、今、動かないとね」。その本気度は学生たちにも伝わっていました。2年生の大貫さんは、こう話してくれました。「この学科の先生方は、柔道整復学という学問の可能性を真剣に考えてくださっています。来年4月には附属の接骨院ができますし、卒業する頃には大学院も用意されます。期待にこたえて、一歩も二歩も進んだ柔道整復師になりたいです。実習以外に柔道の授業もあって、

礼儀や配慮を学んでいます。相手を投げたとき怪我をしないように、きちんと最後まで手を添える。お互いの信頼関係を生み出すその配慮は、患者さんとの触れ合いを大切にしている精神にも通じるものだと思います」。教育として精神面までサポートするのは大学では珍しいこと。「柔道を通して身につく優しさや思いやり。それは今の医療に欠けている部分かもしれません。誰かが痛がっていたら、すぐに手を差し伸べられるようにならないとダメ。それを感じ取ってくれる、いい若者がどんどん育っていますよ」と語る刈屋先生。ここから巣立つ柔道整復師には、きっと明るい未来が待っています。



feel TEIKYO   
あなたにつながる帝京大学 撮影・浅田政志



帝京大学 本部大学PR推進室  
TEL.03-3964-4162  
〒173-8605 東京都板橋区加賀2-11-1



帝京大学をもっと感じるマガジンをお届けします  
帝京大学のあれこれを心地よい写真とともにお届けする冊子  
「feel TEIKYO」キャンパスライフ編・ジョブガイド編を配布中。  
請求先→03-3964-4162（本部大学PR推進室）